

かり物ではなく、住職の所有物」との考えがあると思われます。

「門信徒の個人情報は門信徒からの預かり物」との認識に基づいた、慎重な取り扱いが求められています。

「宗教離れ・寺離れ傾向」の中の危機感は、門信徒の共有の寺院を形成する運営が求められているにもかかわらず、真逆な対応をしているのではないでしょか。



戦後80年に寄せて —沖縄から聞く平和の声—

淨土真宗本願寺派では、戦争の反省を踏まえて、平和を願う法要やさまざまな

おわりに

「宗教離れ・寺離れ傾向」の中の危機感は、「選ばれる寺院」になることにより対応しようとする傾向にあります。そこで「共に真宗の教えに生きる」ことより、社会の中で評価されることを重視します。特別視されることは、多くの場合、社会の差別観念につながることであり、多数が指標となります。差別は、いじめがそうであるように、その多くは、多数者が少数者に対して行われます。し過去帳開示指摘者を攻撃する傾向が顕著

差別事案指摘者への攻撃

過去帳等を開示した住職の多くは、「寺院の存在を知らしめるため」、「門信徒をはじめとした要請があつたため」と自身の行為を「要請に応えること」と捉え、「寺院のためになる行為」と善意を強調する傾向にあります。従つて「過去帳の開示は差別行為」との指摘に対し、過去帳開示指摘者を攻撃する傾向が顕著

です。自らの開示行為により問題が惹起したにもかかわらず、問題指摘者の指摘行為により行為者の「人権」が傷つけられた、との主張です。問題のでつち上げは論外ですが、差別行為の指摘はその事実関係の確認の上、正確に対応する必要があり、差別のない社会をめざす上で、何が重要かを考えたいものです。

かしその多数者の一人一人も、被差別者になる可能性を秘めています。だからこそ、少数者の権利を守ることと、力なき者の権利を守る社会を求めていくことが重要なのです。

私たちの教団は、宗祖の時代を除き、時の権力者や在地の有力者に支えられて生きてきた歴史も持っています。それが真宗の教えに基づくあり方だったのか、信仰に生きた方々と共に歩んできたのかを検証することが必要です。差別者や権力者と共に歩むのか、被差別者や非権力者と共に歩むのかという真宗信仰の真価が問われている問題が「過去帳等開示問題」だと考えます。



戦争の記憶と平和を希求する心

活動を続けてきました。その一つとして、総合研究所でも平和に関する研究に取り組んでいます。特に、宗門の平和活動の一環として、2016年から4年間にわたり沖縄戦や戦争体験者の証言を聞き取り、その成果をまとめて2020年に映像教材『ドキュメンタリー沖縄戦』として発表しました。この教材は、宗門

本年、日本は戦後80年を迎えました。80年という年月は、一人の人生を超えるほどの長さです。その間、日本は戦争の惨禍を経験することなく歩みを進めてきました。これは決して当たり前のことでなく、先人たちの願いや努力の積み重ねによつて守り抜かれたものです。

しかし視野を世界に広げると、現実は大きく異なります。中東やウクライナなど、地球のあちこちでは戦争や紛争が絶えず、人々が命を落とし、生活の基盤を奪われています。戦争のない日常を生きる私たちが忘れてはならないのは、この平和は決して当たり前のものではなく、いつでも揺らぎうるはかない基盤の上にある、ということです。だからこそ「戦争の記憶」をどう継承するのか、その問い合わせるがあらためて重みを持つて迫ってきます。

内の平和学習会だけでなく、他宗派や自治体、さまざまな団体でも活用されています。さらに、戦後80年に向けては、沖縄の方々とともに毎年6月23日の「慰霊の日」に関連する行事に参加し、戦没者を追悼しながら、恒久平和を願う歩みを続けてきました。

沖縄戦は、一般住民を巻き込み「ありつけの地獄を一つに集めた」とも表現される凄絶な地上戦でした。逃げ場のない島で、軍人だけでなく多くの住民が犠牲となり、家族や生活が引き裂かれました。その傷痕は、80年を経た今も、沖縄の人々の記憶に深く刻まれています。

さらに沖縄は、戦争が「過去の出来事」とどまらない土地でもあります。日本にある在日米軍専用施設の70・27ペーセントが沖縄に集中し、その面積は沖縄本島の約15ペーセントを占めています。基地の存在は、日常の風景の中に「戦争の影」を常に映し出しているのです。

ある方の証言が心に残っています。

「先日の夜、米軍基地の明かりが夜通

し煌々とついていたのです。何が起こっているのか不安に思っていたら、翌日のニュースで、アメリカがイランの核関連施設を攻撃したことを知りました。攻撃機が沖縄から飛び立つたわけではないで、万に備えて基地全体が稼働していました」

沖縄の基地は、遠い国の戦争ともつながっています。世界で起きている紛争と沖縄は無関係でいられない。その不安を、沖縄の人々は身近に感じているのです。

戦後80年にあたり、私たちはこうした声を真摯に受け止めなければなりません。戦争の記憶は、ただ「昔の話」として語り継がれるものではなく、いま生きる人々の暮らしに直結する現実の問題として響いています。

沖縄の人々の思いを通して、私たちは平和の尊さをあらためて学び直し、次の世代へと受け渡していく責任を担っています。

消えゆく戦争の記憶と継承の責任

今回の沖縄聞き取り調査で最も強く浮かび上がってきたキーワードは、「継承」という言葉でした。

戦後80年。年月の流れは、確実に「記憶の風化」を進めています。沖縄だけに限らず、日本全国で戦争を直接体験した世代は少なくなりつつあります。沖縄県では、戦前に生まれた80歳以上の方々が、すでに県民全体の一割を切ったといわれます。かつては地域の集まりや学校で、戦争体験を語ることができた「語り部」の方々も、今や高齢化によつて活動を続けるのが難しくなつてきています。

戦争の記憶は、語る人がいなければやがて途絶えてしまいます。戦争を知らない世代にとって、それは遠い歴史の「コマとなり、実感の伴わない「出来事」へと変わつてしまつ危うさを抱えています。そうした中で沖縄の人々は問い合わせ続けています。いかにして戦争の悲惨さを伝えます。

え、次の世代につなげていくのか、と。これは単に沖縄に限られた問題ではなく、戦後80年を迎える私たちすべてに突きつけられた課題です。

「継承」という営みは、記録や証言を保存することにとどまりません。それは、体験者の思いを「自分の物語」として受けとめ、私たち自身の生き方の中に生かしていくことです。沖縄で出会った方々は、そのことを強く語つてくださいました。

戦争の記憶が希薄になつていく今だからこそ、沖縄からの問い合わせに真摯に向き合つていきたいと思います。

たびに「平和とは何か」と問いただすと言います。

「先人が託したのは『二度と戦争を繰り返してはいけない』という思いだと思います。沖縄では土地を奪われ、多くの基地が今も残つています。補助金目当てだと誤解されることもあるけれど、本当に島の人々は純粹に『基地には出て行つてほしい』と思つてているのです」

80代の男性は、当時の避難の様子を伝えてくれました。

60代の男性は、母から聞いた戦争の話を思い起こしながらこう語ります。

「戦争というのは勝ち負けではありません。生き延びるためには、他者を殺さねばならない状況に置かれる。人間が人間でいられなくなる、それが戦争の本当の悲惨さだと思いま

す」

沖縄県では6月23日を「慰霊の日」と定めています。沖縄戦での組織的な戦闘が終結した日であり、毎年この日には糸満市摩文仁の平和祈念公園で「沖縄全戦没者追悼式」が営まれます。県内各地でもさまざまな慰霊の行事が行われます

50代の男性は、歩く



歩いてつなぐ沖縄戦の記憶

沖縄県では6月23日を「慰霊の日」と定めています。沖縄戦での組織的な戦闘が終結した日であり、毎年この日には糸満市摩文仁の平和祈念公園で「沖縄全戦没者追悼式」が営まれます。県内各地でもさまざまな慰霊の行事が行われます

「遺体が道に転がっているから、まつすぐ歩けなかつた。踏むことはできないから、右へ左へと避けながら歩いたのです」

40代の男性は、歩きながら戦争当時の景色を重ねます。

「今は木や家があつて日陰がありますが、当時は焼け野原で木一本残つておらず日陰なんてなかつた。でも、死の恐怖に追われながら歩いた先輩方は、暑さを感じる暇もなかつたのかもしれない。3キロの道のりだけど、少しでも当時の思いを体験したいんです」

また、祖父と孫が一緒に参加する姿もありました。80代の男性は、中学生の孫と歩きながら語ります。

「昔は、あんた方のような年齢の子どもたちが鉄血勤皇隊として駆り出されたんだ。訓練も受けずに弾薬や食事を運ばされ、一番危険なところを歩かされたんだよ」

孫は「暑いけど、平和が大事だと思わされた」と短くも力強い言葉を残してくれました。

の学校で平和学習の講話を終えられたと上原さんは語ります。

「後継者づくりをやらないとね。私たちもあと何年生きられるかわからない。だから後輩にバトンタッチせんといかんのです。80年前の戦争の苦しみや生きざまは、私たちが語らなければ誰も伝えられない。教材が初めてあるわけではないから、私たちの体験そのものをヒントとして伝えるしかないんです」

その口調には、使命感の重さとともに、子どもたちへの強い思いがにじんでいました。

戦争体験を「どう伝えるか」には難しさもあります。かつて、ひめゆり学徒隊の方々が修学旅行生に体験を語つたときのこと。

「ガマの中で、軍人さんの手当てをしました。麻酔なしで足を切断する手術を手伝つたこともあります。傷口に湧いたウジ虫をピンセットで取つたこともあります」

「遺体が道に転がっているから、まつすぐ歩けなかつた。踏むことはできないから、右へ左へと避けながら歩いたのです」

40代の母親は、小学4年生の息子と一緒に参加しています。祖父の遺骨はいまだに見つかっていません。子どもに戦争の話をどれだけ伝えればいいのか、迷いながらも続けています。

息子に戦争について尋ねると、「ひいおじいちゃんに戻つてきてほしい」と素直な言葉が返つてきました。

道を歩くことは、単なる追体験ではありません。過去を背負つた世代から、未来を担う世代へと想いをつなぐ「継承の営み」そのものです。炎天下の3キロの行進に込められた一步一歩が、戦争を忘れず平和を願う確かな歩みとなつていています。

昨年10月、転倒して大腿骨を骨折し、

入院生活を余儀なくされたこともあります。しかし驚くほどの回復力で再び語り部の活動に復帰し、今年もすでに三つ一人になっています。



上原美智子さんが講話で使う写真パネル

れました。



上原美智子さん

平和を語り継ぐ使命

—上原美智子さんの記憶のリレー—

沖縄県平和祈念資料館「友の会」(以下「友の会」)で戦争体験の語り部を務める上原美智子さんは、宗派制作の映画『ドキュメンタリー沖縄戦』でも「自身の体験を語つてくださいました。現在89歳。今や「友の会」で、実際に体験を語り平和講話を行える方は、上原さんただ一人になっています。

昨年10月、転倒して大腿骨を骨折し、入院生活を余儀なくされたこともあります。しかし驚くほどの回復力で再び語り部の活動に復帰し、今年もすでに三つ一人になっています。

ら答えを引き出していく。一方的に語るのではなく、対話を通じて戦争の現実を共有していくのです。

「平和な時代に生まれた皆さんだからこそ、この日常を長く続けてほしい。そのため私たちは、戦争の苦い体験を伝えていくのです。二度と戦争を起こしてはいけないという思いを受けとめてください」

こうした経験から、戦争体験者自身も「伝え方の研修」を受けるようになりました。小学生には小学生に合わせた話を、大人には大人向けの内容を。対象に応じて語り口を工夫しながら、体験を伝える努力が続けられているのです。

上原さんも、写真パネルを用いながら子どもたちに問い合わせる形で話を進めます。

「この桶、何に使いますか? ガマの中にはトイレがないんですよ。昼間は外に出られないから、ここにおしつこうんちをして、夜になつたら外に捨てに行くんです」

そんな身近な生活の話題から始める

そう語る上原さんの講話に、子どもたちは強い関心を示します。「私が30分話すと、その後30分は質問が止まらない」と笑顔で語る姿からも、伝えることへの喜びと使命感が伝わってきました。

「私たちはあと何年生きられるかわかりません。けれども、生きている間に必ずあの体験を語らなければならない。そして、私たちが亡くなつた後は、今度はあなた方が後輩に伝えていってほしい」

89歳の小柄な体に宿るその強い意志は、まさに「記憶のリレー」のバトンそのものです。上原美智子さんの言葉から、平和を語り継ぐことの重さと尊さが、私たちにも静かに伝わってきます。

3. まさに「記憶のリレー」のバトンそのものです。上原美智子さんの言葉から、平和を語り継ぐことの重さと尊さが、私たちにも静かに伝わってきます。

4. 3. まさに「記憶のリレー」のバトンそのものです。上原美智子さんの言葉から、平和を語り継ぐことの重さと尊さが、私たちにも静かに伝わってきます。



仲村真さん

平和祈念資料館友の会への
申し込みについて
(依頼できること)
・ 平和講話
・ 平和祈念公園内の案内
・ 戰跡案内

（申し込み方法）

1. 沖縄県平和祈念資料館ホームページ「各種申請書ダウンロード」から「友の会派遣依頼申込書」をダウンロード。
2. 必要事項を記入のうえFAXにて送付。

FAX..098-997-3947
(24時間受付)
※電話..098-997-3844
(平和祈念資料館→「友の会」につなぐ)
※事務局対応可能日..
水曜13..00~17..00

費用

- 協力金
- 必要に応じて交通費等の諸費
(詳細は「友の会」にお問い合わせください)

5. 戦後世代が支える平和学習
— 沖縄『友の会』の取り組み

「友の会」の事務局長を務める仲村真さんは、戦後生まれの、いわゆる戦争を体験していない語り部です。定年退職前から長年ボランティア活動に従事し、体

6. 戦後世代が支える平和学習
— 沖縄『友の会』の取り組み

「友の会」の事務局長を務める仲村真さんは、戦後生まれの、いわゆる戦争を体験していない語り部です。定年退職前から長年ボランティア活動に従事し、体

中で、平和を学ぶのにもっとも適した場所だと私は思います」

7. 戦争については多様な歴史観があります
が、仲村さんはそれを否定しません。

8. 「それ自分が自分の考え方や歴史観を持ちながら、『一つ学びに行こう』という気持ちで沖縄を訪れていただければいい。沖縄にはニュートラルに話してくれる人がたくさんいます。沖縄で学ぶのは『戦争』ではなく『平和』です。沖縄の人々は今、本当に平和なのか。ぜひ現地に来て、自分の感覚で受け止めてください。そして平和祈念公園に来ていただければ、私たち『友の会』がみなさんの学びをお手伝いします」

9. 宗派が制作した映画『ドキュメンタリー沖縄戦』をきっかけに、教区や組、寺院単位での研修旅行として沖縄を訪れる人々が増えているそうです。今後、平和講話や戦跡案内を依頼したい場合は、前頁下段の方法で「友の会」へ申し込みが可能です。

10. 生き方としての平和
— 沖縄から学ぶ平和活動の本質

11. 沖縄県平和祈念資料館学芸員で、沖縄戦研究者の川満彰さんは「沖縄の平和活動は政治やイデオロギーの問題ではない」と語ります。

12. 戦争を政治や思想の立場から論じると、どうしても「どちらが悪いか」「どちらが正しいか」という議論に終始しがちです。しかし川満さんは強くこう訴えます。

13. 「戦争を正当化すること自体が間違います」

14. さらに川満さんは、平和を続けていくための姿勢として「平和事業」と「平和活動」の違いを指摘します。

15. 「行政の人がすべてそうではないけれど、多くの人がしているのは『平和事業』であって、『平和活動』にはなつてないよう思います。事業だから、担当者が異動したり、期間が来れば終わってしまう。でも本来、平和とは一人ひとりの『生き方』です。だから平和事業に関わることは大きな役得なのです。事業



川満彰さん

として関わったことが活動として受けとめられるようになると、その経験そのものが人を育てるのです。平和活動というのは、自分自身の誇れる生き方として関わるということです」

川満さんは現在、大学の講義を通じて学生たちに「生き方としての平和活動」という考えを伝え続けています。それは、平和を守る営みを一時的な事業ではなく、一人ひとりの日々の生き方としての活動として根づかせようとする試みでもあるのです。

対馬丸の記憶と平和の継承

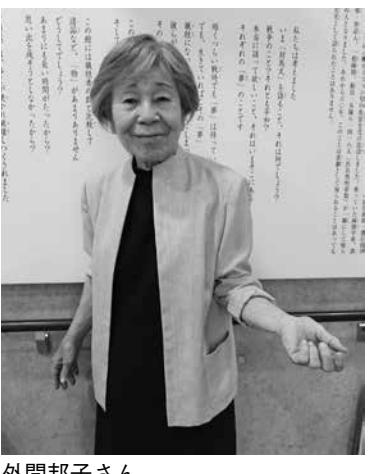
対馬丸記念館の常務理事、外間邦子さんは、二人の姉、外間美津子さん（当時10歳）と外間悦子さん（当時8歳）が学童疎開のために対馬丸に乗船し、犠牲になった経験をお持ちです。当時、海上の危険性は認識されていましたが、子どもたちは「ヤマトへいく」とはしゃいでいたといいます。

沖縄方面に配備された海軍部隊1万人のうち、戦闘訓練を受けたのはわずか2500人。残りのうちの4000人は防衛召集された県民でした。武器もほとんどなく、手製の槍で出撃した者も多く、10日間で全滅しました。また、沖縄全体では住民の4人に1人が犠牲となりましたが、場所によつては一家全滅もあつたといいます。「こうした数字の裏にある、一人ひとりの命の重みや犠牲を知ることが大切です」と屋良さんは強調します。

また、現在の沖縄についても触れます。「80歳以上の方々は笑顔で沖縄に来る人を歓迎してくれるけれど、心や身体



屋良朝治さん



外間邦子さん

「対馬丸事件では約1000名の子どもたちが犠牲になりました。この未来を奪われた子どもたちの叫びや悲しみを、

私たち遺された者が全身で受け止め、平和学習を通して今の子どもたちに伝え、体験してもらうことが私たちの役割だと思っています。亡くなつた方々の魂をつなぐことでもあるのです」と外間さんは語ります。

沖縄では6月を平和月間としており、対馬丸記念館にも多くの子どもたちが訪れます。外間さんは、「対馬丸記念館は、過去の子どもたちと今の子どもたちが直接出会う場です。平和は誰かが作つてくれます。

童疎開のために対馬丸に乗船し、犠牲になつた経験をお持ちです。当時、海上の危険性は認識されていましたが、子どもたちは「ヤマトへいく」とはしゃいでいたといいます。

私たちが犠牲になりました。この未来を奪われた子どもたちの叫びや悲しみを、私たち遺された者が全身で受け止め、平和学習を通して今の子どもたちに伝え、体験してもらうことが私たちの役割だと思っています。亡くなつた方々の魂をつなぐことでもあるのです」と外間さんは語ります。

沖縄では6月を平和月間としており、対馬丸記念館にも多くの子どもたちが訪れます。外間さんは、「対馬丸記念館は、過去の子どもたちと今の子どもたちが直接出会う場です。平和は誰かが作つてくれます。

沖縄戦の記憶と心に触れる学び

旧海軍司令部壕事業所所長の屋良朝治さんは、修学旅行で訪れる生徒に沖縄戦の話を伝え続けています。屋良さんは生徒たちに、表には見えない沖縄県民の悲しみに気づいてほしいと語ります。

「生徒さんたちには、80年前の出来事は遠い世界の話に見えるんです。戦後80年間続いた『当たり前』の生活の裏に、かつては当たり前ではなかつた時代があつたことを知つてほしい」と屋良さんは話します。



中岡順忍輪番

と中岡輪番は強調します。

また、沖縄だけでなく広島・長崎、さらには長野の松代大本營跡なども含め、戦争や平和の課題は多角的に考える必要があると指摘します。「沖縄は本土決戦までの時間稼ぎとして犠牲となつたとも言われます。平和の取り組みは現地で顔を合わせ、人と人が交流し、学びを深めて初めて意味を持つのです」と述べます。

沖縄別院の中岡順忍輪番は、平和活動において宗派の枠を超えた協力が不可欠であると話します。

「沖縄別院では、大谷派の別院とも協

力して平和活動を進めています。浄土真宗本願寺派だけでできることではなく、他の宗派や研究機関、地域団体などとも連携しながら取り組むことが大切です」

れるものではなく、一人ひとりの心の中から生まれるもの。その心を育てることが私たちの使命です」と話します。

外間さんの思いは、単なる記憶の伝承ではなく、未来の子どもたちと共に平和な社会をつくる営みとして実践されています。対馬丸記念館は、過去と現在、そして未来をつなぐ場として、日々子どもたちと歩み続けているのです。



石川八代子さん



大城貴代子さん

間関係の重みが不可欠であることを教えてくれます。

沖縄からの平和への願い

沖縄別院責任役員の大城貴代子さんは、昭和15年に山口県で生まれました。本土での戦争のこととは、幼い頃の記憶としてかすかに覚えているけれど、沖縄の戦争についてはほとんど知ることがなかつたといいます。

住んだ大城さんを待っていたのは、米軍統治、という現実だった。島のあらゆるこ

派が沖縄での平和活動を継続してきたことについて、次のように語ってくださいました。

はじめて宗派の方々が沖縄に来られ、「沖縄戦の調査を行う」と聞いたとき、私は正直、本当にそんなことができるのだろうかと疑っていました。沖縄の人々は、歴史の中で何度も本土に裏切られ、捨て石にされたという思いを抱いてきました。だからこそ、本願寺派が本気で沖縄と向き合うつもりがあるのか、実のところ半信半疑だったのです。

実際に映画公開後は、平和学習の一環で沖縄を訪れる人が増え、浦添市の沖縄別院にも団体で訪れる方が

訪ね、各地で人々の声を聞き、沖縄戦や今の状況を真剣に受け止める姿を見て、「これは本気なのだ」と感動しました。特に、毎年「慰靈の日」に与那原町の人たちと一緒に平和行進をし、平和祈念式典にも参加し続けておられる姿には、本当に頭が下がります。口先だけではなく、沖縄の人々と共に歩んできた姿勢が、多くの人の心を動かしたのだと思います。

やがて沖縄の歴史を深く知るにつれ、大城さんの心には強い思いが芽生えました。

「沖縄は住民を巻き込んで戦場となりました。それを思つと、6月23日（慰靈の日）が近づくたびに胸が苦しくなります。『軍隊は人を守らない』——このことを決して忘れてはならないと思います」

そして大城さんは、今の社会のあり方に不安を抱いています。

「長江の伏見は、うつ戦前の空氣でござ

「ならない」という切実な叫びは、過去を振り返るだけでなく、今を生きる私たちに課された課題を照らし出しています。

大城さんの歩みと声は、未来を担う人々への確かな平和のメッセージとなつてまいります。

沖縄戦を見つめ、未来を拓く —宗派の平和への実践

沖縄別院総代の石川八代子さんは、宗

かもしれません。

多くなりました。私自身も、そうした方々に沖縄の歴史を伝えるため、何度も別院に足を運んでいます。本土の人々が沖縄戦を知り、沖縄に関心を寄せてくれるようになったことは、本当に大きな変化であり、素晴らしいことだと感じています。

こうした成果はすべて、「本気」と「継続」の力の賜物です。今後も宗派が平和の活動を真剣に続けてくださることを、心から願つていま

ちらは金網で囲まれ、通貨はドル、交通ルールも社会制度もアメリカ式。食べ物までがアメリカから持ち込まれる生活

「こか似ていると感じるので
す」
だからこそ、大城さんは強く願つてい
ます。

